

日本の電力王

ふくざわ ももすけ  
福沢 桃介 (1868-1938)

大同電力ほか



『福澤桃介翁傳』  
より

## § 人物データファイル

### 出生

慶応4年6月25日(1868)武蔵国横見郡荒子村(現・埼玉県比企郡吉見町荒子)に、岩崎紀一の次男として生まれる。岩崎本家は旧家で一族には資産家もいた。母サダは分家し、婿養子の紀一と結婚。家業は貧しい農家。

### 生い立ち

母は農業のほか荒物屋で生計を支えたが、父は代々名主を務めた家の中で、学問はあったものの風流人で農業には向かず、岩崎本家が出資者の一人であった第八十五国立銀行の書記を一時務め経済的余裕ができたが、長続きしなかった。子沢山の生活は貧しく「1億円の金持ちになる」を心に刻む。幼少の頃から神童と呼ばれ、兄は小学校を終えると丁稚に出たが、桃介は川越の中学に進学。さらに親類知人の援助で、明治16年(1883)慶應義塾に入学した。

### 実業家以前

在学中の学力優秀と人目を引く行動や美少年ぶりに、福沢諭吉とその家族に次女・房の夫として着目され養子を打診される。当初は断ったが、夢であった海外留学が実現できるということで明治20年(1887)入籍(後に分家)し、直後米国へ留学。ニューヨーク州のイーストマン・ビジネスカレッジを4ヵ月で卒業し、先進国の実学を現場で学びたいとペンシルヴェニア鉄道に入り実務見習いとなる。諭吉の知遇を得て、全線フリーパスの支給や技術・経営関係書類の全面的な開示などの特別待遇の研修を受ける。また物怖じしない性格から、米国視察に来た政財界の要人の観光案内や接待も厭わず、日・米の人的ネットワークを築く。岩崎久弥、松方幸次郎、

星亨らとも親交を深める。

明治22年（1889）帰国。すぐに房と結婚し北海道炭鉱鉄道に破格の待遇で就職。社長が堀基から高島嘉右衛門に代わって、占いに頼った経営になり解雇されるが、すぐに井上角五郎に交代したため復職。しかし、外地への石炭販売のため購入した英国籍の運搬船上で咯血し、辞職した。結核療養中、先の見えない療養生活の費用を稼ぐために始めた株式相場で財を成す。

結核回復後31歳で、松永安左エ門を仲間に、諭吉の出資も得て丸三商会を設立。米国の商社と枕木の輸出が纏まりかけた時、東京興信所の「信用絶無・資産僅少」の判定から資金繰りが閉ざされる。判定の原因究明と資金繰りに奔走するが、丸三商会は2年で閉鎖。信用調査で相場師と判定され、岳父諭吉からは「目玉が飛び出るほどの御叱りを受けた」。この時の身内や慶應義塾の先輩友人らの厳しい対応は、これまでの人生観に鋭い反省と覚悟、そして反発心を促す大きな挫折であった。この時2度目の咯血。

明治34年（1901）北海道炭鉱鉄道に再び入社。日本初の英国からの外資導入を手掛けるなど有能な社員として5年間働く。北海道炭鉱鉄道を辞した後、日露戦争による株式暴落の最中、北炭株等を売り素早い手仕舞いで巨万の財を得る。「飛將軍」「株成金」の綽名がつく。

30歳から約10年の間に、利根川水力電気設立、王子製紙取締役、丸三麦酒買収、帝国人造肥料設立、広滝水力電気の大株主、東京地下電気鉄道発起出願、瀬戸鉱山設立、日清紡績設立、豊橋電気大株主・取締役、高松電気軌道設立発起人などに関わる。また、諭吉のお供や結核療養予後のため全国各地を巡ったことが、後年の発電開発に繋がる。

## 実業家時代

相場の世界から、事業に転換を決意。明治41年（1908）松永安左エ門の誘いで、福博電気軌道（後に、博多電燈・広滝水力電気・九州電気と合併し九州電灯鉄道になり東邦電力に繋がる）を設立、社長に就任。松永の働きにより短期間で軌道敷設が実現し、その経営手腕から名古屋電燈の経営のテコ入れを依頼される。明治43年（1910）大株主となり経営に参画する

が、地元の「乗っ取りでは」の反発に、あっさり辞任。しかしこの時、急峻で豊富な水量の木曾川での水力発電に着目し現地調査に入り、明治44年（1911）八百津発電所の建設に着手。木曾は御用林があり、皇室用材運び出しの筏流しがダムでせき止められるため、周辺に軽便鉄道の敷設を条件に認可が下りる。この頃、高松電気軌道、愛知電気鉄道（後に名岐鉄道等と合併し名古屋鉄道）、日本瓦斯、四国水力電気、浜田電気、野田電気、佐世保電気等々、地方電気会社社長を兼任しており電気電力のオーソリティーとなっていた。

名古屋電燈から再度の要請を受け常務に、大正3年（1914）には社長となり、賤母<sup>しずも</sup>発電所につづき、大桑、須原、読書<sup>よみかき</sup>、桃山、大井、落合の発送電所を次々着工。また、名古屋電燈から木曾電気製鉄（興業）を分離設立。北陸電化（後の日本水力）、大阪送電、矢作水力等を設立。

大正9年（1920）木曾電気興業、日本水力、大阪送電を合併、大同電力と改称し社長となる。最大級の大井発電所建設の最中、関東大震災により国内での金融が途絶し、外債募集のため背水の陣で秘書と2人渡米する。排日運動が巻き起こり最悪と思われる条件のなか、総額2千5百万ドルの外債を成功させる。これは民間では初の外債導入であった。一水系の発電施設は、一社が計画的に建設してこそ理想的な水力利用ができるという信念「一河川一会社主義」を木曾川水系で実現した。

大量に作った電気の消費先開拓も精力的に行う。不可能といわれた長距離・高圧電送を計画し、須原発電所から犬山、鈴鹿峠を超え大阪まで230キロ間の山越えの鉄塔敷設を実現させ、大消費地の関西まで送電した。また、既に運行していた国鉄の電化が遅々として進まない。ならばと、大阪―東京間に民間電車を併走させる計画を後藤新平に進言。後藤の賛同を得て、東海道電気鉄道を設立。名古屋―豊橋間のレールを敷いた時、出資者の安田善次郎の死去により断念。現在ここは、名鉄名古屋本線が走っている。そして、矢作水力の余剰電力を利用した電解法による、硫酸製造の矢作工業（現・東亜合成）を設立。さらに、大同肥料、大同製鋼（後の大同特殊鋼）等を設立し中京の工業発展に繋げる。

## 政治との関わり

明治45年（1912）政友会の要請を受け、千葉県から第11回衆議院総選挙に出馬し当選するが、1期3年で政界を退く。昭和2年（1927）鮎川義介あいかわよしすけより勅選議員の推薦があったが辞退。政治には関心を示さなかった。

## 社会・文化貢献

慶應義塾創立50周年記念図書館の建設準備委員（全5名）に連なり募金活動を行い、図書館や講堂建設の大口寄付をする。帝国劇場設立発起人に大倉喜八郎、渋沢栄一等と加わり、大正15年（1926）には取締役会長に就任した。

工業技術者養成のための教育機関を構想したが、生前には実現せず、大同電力解散後、同社系列の31社が共同出資し大同工業教育財団を設立し、昭和14年（1939）大同工業学校を設置。現・大同大学は、中部財界の基礎を築いた福沢桃介を大学の祖としている。

## 晩年

昭和3年（1928）突如実業界から引退。関わっていた全ての会社の代表を辞任。引退後は『財界人物我観』『桃介夜話』など著述に勤しむ。昭和13年（1938）2月15日、渋谷上智の本邸にて脳栓塞で永眠。享年70歳。同2月18日、築地本願寺にて葬儀。都立多磨霊園に埋葬。

## 関係人物

**松永安左工門** 明治8年（1875）生まれ。慶應義塾に再入学し、諭吉が日課としていた毎朝の散歩のお供の折、同道の病氣療養中の桃介と知り合う。丸三商会、福博電気軌道に桃介と関わった後、九州電気を設立し、多くの電力会社を併合し東邦電力社長となり、激しい電力競争のもと近畿から東北まで支配下に置いた。民間主導の電力再編を主張したことから「電力の鬼」と呼ばれる。関わった会社は100を数える。7歳年上の桃介とは「主人と家来の如く兄弟の如く表裏一体、電気事業に没頭した」と語り、生涯続いた関係であった。

**川上貞奴** 桃介が慶應義塾の学生時代に知り合う。この時貞奴は10代

半ば。すでに伊藤博文など政財界の大物に最上よこにされる日本橋葎町の売れっ子芸妓であった。書生芝居で人気の川上音二郎と結婚。海外公演の時舞台上に立ったことから、欧米で大好評を博し日本の女優第1号と呼ばれる。音二郎の死後、桃介と再会。桃介は公の場にも貞奴を同伴したので世間の耳目を集めたが、木曾川水系に次々と発電所を建設中の多忙な桃介のパートナーとして、名古屋二葉町の屋敷や木曾川の工事現場へ訪れる内外の仕事関係者の接待や、強健でない桃介の健康面など、晩年近くまで支えた。

## エピソード

木曾川水系の7つの発電所のヘッドタンクの礎石に、各界の巨星の肖像画とメッセージを掲げた。大井発電所は福沢諭吉、読書発電所は山形有朋、賤母発電所は西園寺公望、落合発電所はトーマス・エジソン（米・発明王）、大桑発電所はジョルジュ・クレマンソー（仏・首相）、須原発電所はロイド・ジョージ（英・首相）、桃山発電所はグリエルモ・マルコーニ（伊・無線電信発明者）。桃介が直々に依頼をしたという。しかし大戦時の供出のためか、海外の各氏のレリーフは残っていない。現在、読書発電所は、国の近代化遺産（重要文化財）に指定され、発電所建設当時拠点として建てられた三留野駅（現・南木曾駅）近くの桃介の別荘は、復元されて「福沢桃介記念館」となっている。

慶應義塾の運動会で、大きなライオンの顔を描いた白シャツで走ったことが、福沢一家の目につき、次女・房の候補となった話は有名。

株で「大成金」と言われても、まだ事業家としては知られていなかった頃、西園寺公望との間を取持ってくれるという友人の誘いを断り、西園寺の最上の芸妓を全て数ヵ月も借り切って、これを不審に思った西園寺が桃介の存在を知る。ここから知遇を得、西園寺が閑地に付いてからも、好物の宮繁大根を手土産に訪ねた。

金銭上の公私の別に極めて潔癖で、自らを「ケチの桃介」と言っていたが、隠れて多くの生きた金を使った。たとえば、ダイヤモンド社を創業したばかりの石山賢吉の資金難を知ると、「毎月決まった額を幾月にも渡り、そっと渡してくれた。また、多くの財界人に引き合わせてくれた」と石山

は記している。しかも『ダイヤモンド』誌に桃介の不都合な記事が載っても、全く関知しなかった。

## キーワード

**桃介式** 桃介著作の題名。その内容は出世・成功の技と心得を直裁に指南したサラリーマン処世訓だが、要領よく立ち回る人々の言動を「桃介式」と当時呼んだ。

**五大電力** 明治以降各地に乱立した電気会社は合併買収をくり返し、大正に入って東京電燈、東邦電力（松永安左エ門）、大同電力（桃介）、日本電力、宇治川電力の五大電力となった。

**電力管理** 戦時体制強化に伴う電力不足克服のため、電力事業の国家管理法が昭和13年（1938）制定。これにより電力は国家管理となり「日本発送電」が設立され、五大電力は解散、1発電9配電体制となる。戦後、日本発送電は9電力（後に沖縄を入れ10）に分割された。

## 神奈川との関わり

大同電力は大正12年（1923）東京電燈と、京浜地方における電力供給契約を紳士協定したが、電力会社それぞれが熾烈な競争を繰り広げ紛争問題に発展。結局、大同電力東京変電所は横浜市神奈川区南綱島町字新田耕地に建設はしたが、京浜地区への大規模な割り込みは実現できなかった。

大磯で結核の療養をした。明治29年（1896）から同35年（1902）まで大磯南浜岳（現・東町）の土地を所有したとの記録あり。また箱根、鎌倉扇谷、横浜富岡に別荘を所有していたとあるが詳細は不明。ちなみに、貞奴と川上音二郎の自宅・萬松園跡地は、現在茅ヶ崎市美術館となっている。

## § 文献案内

### 著作

『桃介夜話』福沢桃介著 先進社 1931〈K〉

『福沢桃介の人間学』福沢桃介著 五月書房 1984〈未所蔵〉

『桃介は斯くの如し』（星文館 1923）、『桃介式』（実業之世界社 1911）を所収。

『福沢桃介の経営学』 福沢桃介著 五月書房 1985 〈未所蔵〉

『無遠慮に申上候』（実業之日本社 1912）、稀世の人物評といわれる『財界人物我観』（ダイヤモンド社 1916）を所収。

## 社史

多数の会社を短期間で出願・設立・合併・統廃合し多数の会社に関わったが、今に引き継がれている会社としては、日清紡績、東亜合成、関西電力、中部電力、東邦ガス、大同特殊鋼、名古屋鉄道、帝国劇場などが挙げられ、それぞれに記述が見られる。この他、巻頭に創始者の1人として桃介を挙げている社史も多い。

『大同電力株式会社沿革史』 大同電力 1941 〈Y、K〉

序言に「電気事業者としての福澤桃介氏は、木曾川を離れて福澤氏無く、福澤氏を離れて木曾川の開発無しとも謂うべく…」と記されている。木曾電気製鋼、日本水力、大阪電送合併から、昭和14年（1939）の電力国家管理による解散までを記録している。

『大同製鋼50年史』 大同製鋼 1967 〈K〉

名古屋電燈から電気製鋼所、木曾電気製鉄、大同電気から大同製鋼へ繋がる記載の中、桃介の関心が水力発電を基軸に重化学工業に広がる点が窺える。

『東亜合成五十年史』 東亜合成 1995 〈K〉

『東邦電力史』 東邦電力刊行会 1962 〈Y、K〉

前史編に、関西水力電気、名古屋電燈、九州電燈鉄道の略史あり。福博電気軌道の設立と博多電燈への合併が記録されている。東邦電力設立時社長の桃介の辞任の挨拶文があり、松永の東邦電力に代わるのが見える。

## 伝記文献

『福澤桃介翁傳』 大西理平編 福沢桃介翁伝記編纂所（大同電力内）1939 〈K〉

編纂着手は昭和10年（1935）。桃介は「読者に利益のない伝記は無用の長物。失敗も成功も率直に記述し後人に寄与しなければならぬ」と言っていたが、刊行を待たずに亡くなった。写真と逸話も豊富に収録。

『財界の鬼才 福沢桃介の生涯』宮寺敏雄著 四季社 1953 〈K〉

著者は大正4年(1929)名古屋電燈に入社し、桃介の部下として働く。後に大阪電力、大同化学工業、大同電力の取締役等を経て揖斐川電気工業取締役社長。巻末特別寄稿に、松永安左エ門が「福沢桃介さんと私」を寄せている。

『激流の人 電力王福沢桃介の生涯』矢田弥八著 光風社書店 1968 〈K〉

『電力王 福沢桃介』堀和久著 ばる出版 1984 〈K〉

『鬼才福沢桃介の生涯』浅利桂一郎著 日本放送出版協会 2000 〈Y〉

「日本の電力王 福沢桃介」『続 武州・吉見の人物誌』長沢士朗著  
吉見町(埼玉県比企郡) 2003 p43-119 〈Y〉

「第二世代への拡がり 福沢諭吉の留学観と桃介」桜木孝司著 『国際ビジネススマンの誕生 日米経済関係の開拓者』阪田安雄編著 東京堂出版  
2009 p219-245 〈K〉

## ¶ 参考文献

「日本の電力王 福沢桃介が今に伝えるメッセージ」『湖畔に刻まれた歴史(湖水の文化史シリーズ3)』竹林征三著 山海堂 1996 p31-87  
(未所蔵)

土木技術者の著者がダム等施設の石碑を紹介し桃介の仕事を称えている。

『冥府回廊 上・下』杉本苑子著 日本放送出版協会 1984 〈Y〉

妻・房の側から桃介を取り巻く人間模様が描かれている。これと同著者の『マダム貞奴』(読売新聞社 1976 〈Y〉)を原作に、NHK大河ドラマ「春の波濤」が昭和60年(1985)放送された。

「大同大学 大学紹介」<http://www.daido-it.ac.jp/daigakusyokai/>  
(参照2011-12-23)

<佐賀原正江>